

第4章 まとめと今後の課題

東京湾要塞の一翼を担って建設された米ヶ浜砲台は関東大震災で被災し、同時に被災、廃止された深田演習砲台の榴弾砲4門を移築、演習砲台として改修され、以後、横須賀重砲兵連隊の演習砲台として敗戦を迎えた。米ヶ浜砲台跡地は連合軍による占領政策下の復興期に開園には至らなかったが、戦後の混乱の中、次代を担う子どもたちのために児童公園の建設が試みられ、高度成長期末期に中央公園として整備され、憩いの場として市民に開放された。その後、平成4年（1992年）には、（旧）平和モニュメントが建設されるなど平和の祈りを込めた都市公園として管理・整備されてきた。

このような戦後の変遷を経てきた米ヶ浜砲台跡に最も大きな変化が加えられたのは昭和45年（1976年）の中央公園建設で、加農砲砲台の胸牆・横牆は削平され、加農砲砲台前面の乾壕は埋め立てられた。それに対して、榴弾砲砲台は胸牆・横牆・砲座など演習砲台時の原型をとどめている。今回の中央公園の再整備工事は加農砲砲台地区が主な整備対象だったため、整備工事に先立って行った確認調査で実態が不明だった加農砲砲台の詳細が把握されたと同時に、東京湾要塞を構成する諸砲台との対照において新たな知見と課題が提示された。新たな知見と課題、東京湾要塞の中での位置づけ、そして、平和を考えるための戦争遺跡としての保護・活用に少しく触れて確認調査のまとめとしたい。

加農砲砲台・砲側弾薬庫は塁道と連絡する交通路としての階段、階下路面と弾薬庫出入口間の空間、弾薬庫内など砲台構造体が良好に遺存していることが確認された。塁道から階段を経由して、深度3.5mの地下に出入口が設けられた砲台は、米ヶ浜砲台以前に建設された砲台には見られない。砲側弾薬庫の出入口が設けられた前面壁は、被覆壁に付帯する煉瓦造アーチから大きく後退して建設され、階下路面とあわせて5.0m×4.0m、20㎡の空間が作出されている。煉瓦造アーチから出入口が設けられた前面壁が後退して建設される例は、明治10年代に建設された砲台には見られず、明治20年代前半の横須賀軍港防禦砲台から取り入れられた様式で、夏島砲台以降に建設された箱崎高砲台、波島砲台に見られるが、米ヶ浜砲台以前に建設されたこれらの砲台はすべて弧状アーチが採用され、米ヶ浜砲台は半円アーチに変化している。また、焼過煉瓦の組積法にも変化があり、夏島砲台では煉瓦アーチの外弧1列だけに焼過煉瓦を、波島砲台では前面壁外面に普通煉瓦列と焼過煉瓦列を交互に配置するなど普通煉瓦と焼過煉瓦の色調変化を意識した組積が見られるが、米ヶ浜砲台では高温で焼成された焼過面の撥水性を考慮して、露天空間に面した煉瓦造アーチから前面壁までの脚壁、前面壁外面はすべて焼過煉瓦で組積されている。米ヶ浜砲台に見られる建築資材の最も大きな変化は、以前に建設された砲台のヴォールト天井が煉瓦造だったのに対して、無筋コンクリートが採用されたことである。

加農砲砲台・砲側弾薬庫では明治20年代前半に共通する建築上の様式と新たに採用された様式が見られたが、露天空間に面した構造体での焼過煉瓦の組積、無筋コンクリート造ヴォールト天井は千代ヶ崎砲台など明治20年代後半に建設された砲台に引き継がれるが、地下深い弾薬庫の立地、アーチから後退して建設された前面壁、半円アーチの採用などは次代の砲台に引き継がれなかった。米ヶ浜砲台に見られる建築様式は、明治20年代前半と後半の砲台建築様式の過渡期的な様相を示しているが、単に過渡期的様式と位置づけられない砲台建築としての試行錯誤的な側面も考慮する必要があるのかもしれない。

また、米ヶ浜砲台では建築資材の供給先の変化でも新たな知見が得られた。明治10年代に建設された観音崎砲台、猿島砲台、富津元洲砲台では愛知県で土族授産を目的に設立された東洋組で生産された煉瓦が採用され、明治20年代前半に建設された横須賀軍港防禦砲台の夏島砲台に使用された煉瓦には「○の中にカ」や「□の中に上」などの刻印、箱崎高砲台では「放射状」の刻印が押された煉瓦が使用されているが、「放射状」の意匠は横浜煉化製造会社の社章で、「○の中にカ」や「□の中に上」の刻印が押された煉瓦は横浜の居留地遺跡からの多くの出土例から、横浜近傍に存在した民間製造所の製品と考えられている。日清間の緊張が高まる中で、

明治 20 年代後半に観音崎－富津海峡の防衛力強化のために新設された千代ヶ崎砲台、小原台堡壘、また、猿島砲台など既設砲台に増築された電灯所や観測所などの防禦營造物は東京都葛飾区に存在した監獄・小菅集治監で製造された煉瓦が多用された。国家事業の東京湾要塞建設に採用された煉瓦の供給先は、明治 10 年代に士族授産のために設立された東洋組、明治 20 年代前半は近隣の民間製造所、明治 20 年代後半は東京集治監で囚人労働によって製造された煉瓦と顕著な変遷が認められる。これらの背景には、明治 10 年代は西南戦争終結後の国内安定と秩禄処分によって困窮した旧士族の救済、明治 20 年代前半は第 2 次企業勃興に相当し、富国政策として民間資本の育成、明治 20 年代後半では日清間の緊張下で砲台や堡壘の新設、既存砲台に必要な防禦營造物の増築で煉瓦の需要が増大し、東京集治監製造煉瓦の専従的供給といった明治政府にとって維新後の社会変相に伴う国策の一面があったと推定される。米ヶ浜砲台跡で小菅集治監の煉瓦が採用されたことは、後続して建設された堡壘砲台・堡壘に採用された煉瓦供給先の起点と位置づけられ、横須賀軍港防禦砲台建設が進む中、米ヶ浜砲台の建設工事が起工した明治 23 年（1890 年）の国際状況を反映しているのかもしれない。

米ヶ浜砲台の建設では、被覆壁に使用された石材の供給先にも変化があった。明治年間の東京湾要塞に属する諸砲台の建築には、花崗岩、安山岩、粗粒凝灰岩などの切石が多用された。花崗岩は階段踏石、砲座胸牆の一部、安山岩は海岸護岸や埠頭、被覆壁の天端石、出入口の踏み石や金具取付石など、粗粒凝灰岩は砲台出入口や塁道両側の被覆壁に使い分けられたが、粗粒凝灰岩が最も多量に必要とされた。

東京湾要塞建設初期の猿島砲台建設中の明治 15 年（1882 年）1 月 26 日に、建設工事に従事した工兵方面から「猿島砲台建設用石材伐出シ之儀ニ付伺」で勝力崎周辺の石材採掘許可の申請が提出された。工事進捗状況を記載した「工兵第一方面週報」の「工業進歩表 自明治十五年四月二日 至同月四月八日」以前の記載は「豆州沢田石」、以後は「勝力割栗石」に変わることと整合し、猿島砲台建設の建築材として使用された凝灰岩は明治 15 年 4 月を分岐点として「豆州沢田石」から「勝力割栗石」に変更されたと判断される。米ヶ浜砲台・加農砲台建設中の明治 24 年（1891 年）7 月 11 日に工兵第一方面から「米ヶ浜砲臺工事中模様換ノ件」が提出され、「伺ノ通」と承認された。施工変更のひとつに石材についての項目があり、「同砲台ニ是迄使用ノ勝力栗石ハ良質ノモノ近來欠乏シ現今得ラルヘキモノニ在リテハ悪質ニシテ一中略一被覆石ノ露出面ハ総テ房州産元名石ヲ以テ代換使用致シ度」と、良質な勝力石の欠乏によって元名石に代換え使用の許可を求める記載がある。勝力石は猿島砲台以降に建設された砲台の建築材として採用され、その後、第二海堡の捨て石など需用増加によって良質な石材の減少、その代用として「房州産元名石」が採用された経過が想定される。これ以降、千代ヶ崎砲台など明治 20 年代後半に建設された砲台・堡壘、増改築施設は房州石が採用された可能性が高い。

米ヶ浜砲台跡の調査の結果、塁道と砲側弾薬庫・棲息掩蔽部の間を連絡する交通路の被覆壁は壁面に小口、長手が現れる石材は灰褐色で緻密（灰褐色粗粒凝灰岩）、内面に組積された石材は黄褐色・固結度の低い粗粒凝灰岩（黄褐色粗粒凝灰岩）が使い分けられていた。発掘調査で得られたこの知見から、前者は「元名石」、後者は「勝力石」と推定され、米ヶ浜砲台跡建設中に提出された「米ヶ浜砲臺工事中模様換ノ件」を裏付けることになった。塁道－加農砲台を連絡する露天階段の東被覆壁に見られた灰褐色粗粒凝灰岩の中に不規則に黄褐色粗粒凝灰岩が組積されていたのは、演習砲台としての改築と同時に、関東大震災によって生じた西被覆壁の縦方向の亀裂にモルタルを充填、東被覆壁の崩落した石材を積直して修復した結果と考えられる。

日本の要塞建設は明治 10 年代に建設が着手された東京湾要塞建設を嚆矢として、明治 20 年代に入って対馬海峡に対馬要塞、関門海峡に下関要塞、大阪湾に由良要塞の 3 要塞、明治 30 年代には九州北西部に佐世保要塞、長崎要塞、瀬戸内海に広島湾要塞、芸予要塞、津軽海峡に函館要塞、日本海に舞鶴要塞など日本国内の要所に要塞が建設され、また、日清戦争で清国から割譲された台湾島に澎湖島要塞、基隆要塞、朝鮮半島に鎮海湾要塞、永興湾要塞が建設され、日露戦争でロシアから租借権が譲渡された遼東半島の旅順要塞は日本の管理下に置かれた。要塞建設期の明治年間を通して発展してきた要塞建築様式は明治 30 年代に円熟期を迎えるが、東京湾要塞は

唯一明治 10 年代の建設様式を伝え、また、明治 30 年代の要塞建築円熟期に至るまでの建築様式の発展過程を伝えている。

明治 10 年代に建設された猿島砲台跡、明治 20 年代後半に建設された千代ヶ崎砲台跡は、「築造当初の姿を良好にとどめ、我が国近代の軍事、築城技術の具体的様相を理解するうえで重要である」として、平成 27 年（2015 年）3 月 10 日に「東京湾要塞跡」として史跡指定された。東京湾要塞の建設過程を理解するには、猿島砲台跡、千代ヶ崎砲台跡に加え、未指定の明治 20 年代前半に建設された砲台、例えば夏島砲台跡などを介在させることで、近代の「軍事、築城技術の具体的様相」がより理解でき、加えて各期に対応する国内外の社会背景を学ぶ教材となり、さらには平和教育の教材としても活用される「遺跡群」として捉えられる。そのような中で、明治 20 年代前半と後半の建築様式の過渡期的遺構を残す米ヶ浜砲台跡は、明治年間の東京湾要塞建設史上、重要な位置を占める遺跡と評価される。調査対象となった加農砲台・砲側弾薬庫などは調査後埋め戻したが、埋め戻す前に地下施設出入口は土囊で閉塞、階段・乾壕内岸斜面・外岸斜面などの遺構面は不織布で被覆する保護措置を行った。

引用・参考文献

- 赤星直忠 1955. 三浦半島城郭史（上）. 横須賀市史, No. 8 : 1-121. 横須賀市教育委員会.
- 赤星直忠 1955. 三浦半島城郭史（下）. 横須賀市史, No. 9 : 1-74. 横須賀市教育委員会.
- 藤沢一孝 1958. 維新後本邦要塞築城概史 : 1-39. (私家本).
- 浄法寺朝美 1971. 日本築城史—近代の沿岸築城と要塞— : 1-141. 原書房.
- 毛塚五郎 1980. 東京湾要塞歴史（復刻版） : 1-69. (私家本).
- 原剛 2002. 明治期国土防衛史 : 1-581. 錦正社史学叢書. 錦正社.
- 原剛・高村聡史 2012. 第 5 章 横須賀の陸軍と東京湾要塞. 新横須賀市史 別編軍事 : 595-664. 横須賀市.
- 野内秀明 2009. 深田演習砲台跡. 近代化遺産・近代遺跡調査概報集, 3 : 3-21. 横須賀市文化財調査報告書, 第 46 集. 横須賀市教育委員会.
- 野内秀明 2010. 東京湾要塞遺跡・夏島砲台跡. 新横須賀市史 別編考古 : 76-80. 横須賀市.
- 野内秀明 2010. 東京湾要塞遺跡・箱崎高砲台跡. 新横須賀市史 別編考古 : 138-141. 横須賀市.
- 野内秀明 2010. 東京湾要塞遺跡・波島砲台跡. 新横須賀市史 別編考古 : 142-143. 横須賀市.
- 野内秀明 2010. 東京湾要塞遺跡・猿島砲台跡. 新横須賀市史 別編考古 : 188-198. 横須賀市.
- 野内秀明 2010. 東京湾要塞遺跡・米ヶ浜（演習）砲台跡. 新横須賀市史 別編考古 : 229-231. 横須賀市.
- 野内秀明 2010. 東京湾要塞遺跡・小原台堡壘跡. 新横須賀市史. 別編考古 : 311-319. 横須賀市.
- 野内秀明 2010. 東京湾要塞遺跡・観音崎砲台跡. 新横須賀市史 別編考古 : 338-352. 横須賀市.
- 野内秀明 2021. 横須賀市 東京湾要塞跡・米ヶ浜砲台跡—明治時代中期に建設された沿岸砲台跡. 第 22 回 三浦半島地区遺跡調査発表会 発表要旨 : 13-16. 横須賀考古学会.
- 野内秀明 2023. 三浦半島の凝灰質砂岩と房州石研究に向けての展望—東京湾要塞跡関連遺跡を中心に—. 房州石の歴史を探る, 第 13 号 : 4-8. 金谷・石のまちシンポジウム実行委員会.

写 真 图 版



1. 猿島砲台跡から臨む米ヶ浜砲台跡



2. 米ヶ浜砲台跡から臨む猿島砲台跡



3. 米ヶ浜砲台跡から臨む観音崎・走水地区堡壘団



1. 調査前の加農砲砲台跡（南西から）



2. 調査前の加農砲砲台跡（北東から）



3. 砲側弾薬庫・北西階段と前面空間



4. 砲側弾薬庫・南東階段と前面空間



5. 砲側弾薬庫・前面壁内面と揚弾施設



6. 砲側弾薬庫・後面壁と排気筒



7. 砲側弾薬庫・脚壁と半円ヴォールト天井



8. 砲側弾薬庫・前面壁通気孔



1. 加農砲砲台・砲側弾薬庫揚弾施設



2. 加農砲砲台・砲側弾薬庫前面空間排水施設



3. 加農砲砲台・砲側弾薬庫北西階段一塁道移行面



4. 移行面下煉瓦積



5. 砲側弾薬庫・排気筒鉄平石被覆状況（調査前）



6. 加農砲砲台・排気筒鉄平石除去後の状況



7. 加農砲砲台・排気筒（北東隅）煉瓦積組積法



8. 加農砲砲台・排気筒排気孔煉瓦組積法



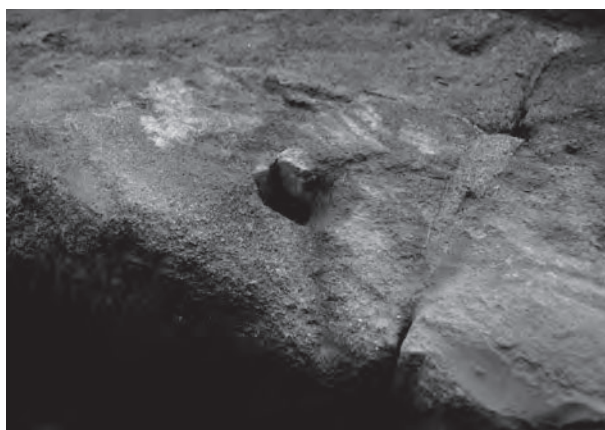
1. 加農砲砲台・壘道—棲息掩蔽部連絡交通路



2. 加農砲砲台・棲息掩蔽部壘道被覆壁



3. 加農砲砲台・棲息掩蔽部壘道被覆壁組積法



4. 加農砲砲台・棲息掩蔽部壘道被覆壁手摺装着痕



5. 加農砲砲台・棲息掩蔽部花崗岩階段踏石



6. 加農砲砲台・棲息掩蔽部花崗岩踏石装着痕



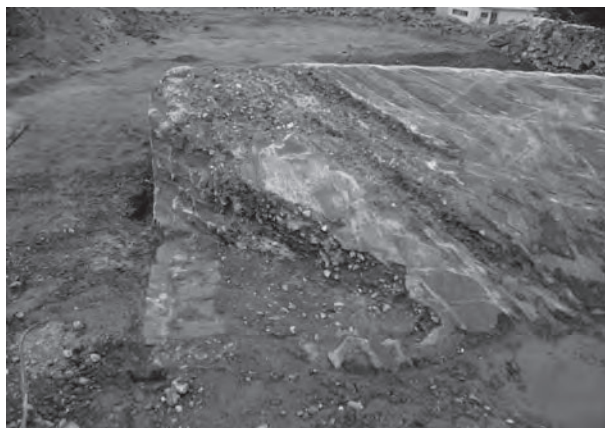
7. 加農砲砲台・乾壕内斜面



8. 加農砲砲台・乾壕外斜面



1. 榴彈砲砲台・觀測所付屬室外背出入口側



2. 榴彈砲砲台・觀測所付屬室外背後面壁側



3. 榴彈砲砲台・觀測所付屬室後面壁組積法



4. 榴彈砲砲台・觀測所付屬室—觀測所連絡伝声管



5. 榴彈砲砲台・觀測所付屬室前面壁内面



6. 榴彈砲砲台・觀測所付屬室—砲座連絡伝声管



7. 加農砲砲台—榴彈砲砲台連絡隧道路面



8. 加農砲砲台—榴彈砲砲台連絡隧脚壁煉瓦刻印



1. 加農砲砲台・砲側弾薬庫階段面保護風景



2. 加農砲砲台・砲側弾薬庫保護状況



3. 加農砲砲台・砲側弾薬庫壘道天端石保護状況



4. 加農砲砲台・砲側弾薬庫遺構面保護後の埋め戻し



5. 加農砲砲台・棲息掩蔽部遺構面保護状況



6. 加農砲砲台・棲息掩蔽部遺構面保護後の埋め戻し



7. 加農砲砲台・乾壕内斜面保護状況



8. 加農砲砲台・乾壕遺構面保護後の埋め戻し

横須賀市文化財調査報告書 第 61 集

米ヶ浜砲台跡
横須賀軍港防禦砲台

発行年月日 令和 6 年（2024 年）3 月 31 日

編集・発行 横須賀市教育委員会（教育総務部生涯学習課）

〒238-8550 神奈川県横須賀市小川町 11 番地

TEL 046-822-8484 FAX 046-822-6849

E-mail se-bes@city.yokosuka.kanagawa.jp

印刷 丸庄 有限会社

（裏表紙説明）

加農砲砲台－榴弾砲砲台連絡隧道（加農砲砲台側坑口）と観測所付属室外背

